

Seishinsha SF Series

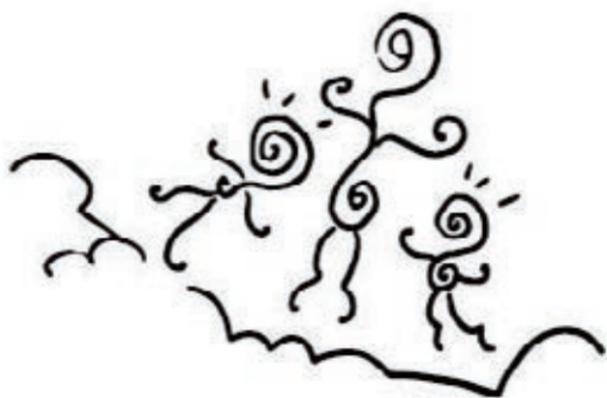


R. A. Lafferty

R・A・ラファティ

蛇の卵

井上 央 訳



Serpent's Egg

青心社

「蛇の卵」。それは本物の超知性を持つ人間。そして世界の敵となる故に抹殺されなければならない存在。

実験体として選ばれた超知性を持つ12人の人間と動物の子ども達、人間のロード・ランダル、歩行型人間模倣タイプコンピューター・イニアル、類人猿のアクセル、オスの子どもアシカ・マリノ、男児天使のルアス、人間の女兒ヘンリエッタ、メスの子どもニシキヘビ・ルーティン、メスの子ども熊ダブ、オスの子どもチンパンジー・シンプ、まだ母親の胎にいるメスの子どもインド象ガジャ、オスの子どもクズリ・カルカジュ、オスの子どもオウム・ポップガイ。彼らの中で「蛇の卵」になるのは誰か？

街学的重層構造の世界と万華鏡のような多彩なイメージが融合したラファティの集大成ともいえる傑作長編！



Seishinsha SP Series

蛇の卵
SERPENT'S EGG

R・A・ラフアテイ
井上 央 訳

目次

第1章	世界の三つのすみっこ	6	第10章	クジラが何かを築いてる	168
第2章	青い目をしたサル	22	第11章	トム・ドゥーリイ島に立つ屋敷	184
第3章	驚異のコンピュータ、 歩いてマイムに興ずる時	42	第12章	夢遊病者のセレナード	206
第4章	人間たちに何が起こったか	58	第13章	短剣の夜	222
第5章	アリ・ウープの渡り道	72	第14章	海底の序曲	238
第6章	夏の終わり	88	訳注		262
第7章	組み立てメカ横丁	108	解説		267
第8章	世界の支配者カンガルー	126	ラファティの想像力	牧眞司	
第9章	アナベラ・聖レッジャー号の上で	148	謎の物語、 眠りと目覚めの物語	井上央	276

蛇の卵

第1章 世界の三つのすみっこ

だからこそあいつを蛇の卵と見なし……
殻のうちに殺してしまうにしくはなし

ジュリアス・シーザー、シェイクスピア

「こともあろうに占星術がコンピューターたちの間にひろがり始めたようだ」ロード・ランダルの父親がある朝、朝食のテーブルで言ったことがあった。

「カンガルーまでが占星術にご専心のようだ」

「なんて世の中になったんでしょね」ロード・ランダルの母親がそのとき答えた。「これじゃ先が思いやられるわ。コンピューターには未来の予想と未来の誘導の区別がつきません。きっと自分の予想したことは、何からなにまで現実にしようとすることでしようよ。たとえどんなに馬鹿馬鹿しいことだつて分かっているけどね。あなた、私たちの『浮かんだ世界』がこれでいいのかって本当に心配になりませんか？」

「そんな心配をするものはだ、アイリス、カンガルーのお相手をするところ構えができていなければ

ならないだろうよ。もしそのだれかが一かどのものならばだ。幸いわれわれは超絶人間じゃあない。まあ、もうちよつとで手が届くかどうかってあたりかな」

さて、ロード・ランダルの両親が朝食のテーブルで交わしたこの会話の切れはしを耳にした時、『王なる者』の心に、凍てつくような恐怖が走ったのはどうしてだったのだろうか？ 少年は臆病な子ではなかった。そしてまたロードの心が凍りついたのと同じ時、この子ととつても親密な関係にある仲間二人が、それとまったく同じ身もすくむ恐怖を感じたのはなぜだったのだろうか？ 他の二人は、その小さな会話のはしを自分の耳で聞いてもいなかったのだ。しかし三人のうちだれか一人が心で感じたことは、いつでも残りの二人にもしつかり伝わり、一緒に味わわれたのだ。

三人は生まれたすぐ後から、全員が九才と十才の間にあるこの時まで、ずっと一緒に育てられてきた。ロード・ランダル、イニアル、アクセルがその三

人である。このとき三人は本当につよく結ばれていた。三つの力が合わさって、驚くべき力を生み出すようになっていた。あるときアクセルがスウィンバーンからもらった二行を仲間の合言葉にしようと言いつい出したくらいだ。

「三人並び立つところ」

王国の影もかすむ」

「そんな合言葉、話にもならないわね」イニアールが難癖をつけた。「何が三人の男よ。女の子一人と男の子が二人でしょう」

「おれが気がかりなのは、その王国とやらの王たちが自分の立場が脅かされていると感じた時、どんな手を打ってくるかってことだよ」アクセルは心底、心配そうだった。「どこかの王だか王たちだかはずで、おれたちをやっかいのタネと感じ始めているんだ。怪しい『蛇の卵』って話、前触れの話、聞いただろうか？」

さて、この話題もまたジョージ・リン・ランドルとアイリス・リン・ランドル（ロード・ランドルの

両親）が朝食テーブルで交わした別の会話の一部に端を発していた。

「私たちが育ててるのは『蛇の卵』じゃないか、と疑いを向けられているようだ」とジョージがある朝言った。

「いったいどの子が？ 三人のうちのだれがそうだっていうの？」アイリスが問い返した。「どの子が処分されても、耐えられないでしょう。でもロード・ランドルを取られたら、きつと一番耐えられなくなるでしょうね。なんてえこ^{ひいき}鼠^{ねずみ}舐^なする母親なんでしょうね、私は。じゃあ、いつ？」

「起こるとすれば、十才の誕生日が来る直前と決まっているさ。われわれのケースを扱うため、すでにドロフォノス山の一体が待機状態に入ったようだ。『ジャングル』の近くで身を隠すようにうろついているやつを目にしたよ。実験が失敗に終わる場合は、いつもこうなると相場が決まっているのさ。ただ『蛇の卵』であるものには、何かの形で予感が与えられるようだね。もちろん、こんなことがそう頻繁

に起こつたりはしない。人口全体からすれば、およそ百万に一つの割だろう。『蛇の卵』の審判が下るのは」

「ある種の特別な実験の場合には、比率が千人に一人に跳ねあがるって聞いたわ。でも私たちの実験がそんな特別の実験なのかどうかは、知りようがないけど。この実験が一体何を目的にしているかぐらいは知りたいと思うのに」

「われわれが『両親』役をしているこの実験の目的はと言うと、『世界を見る新しい見方を探るためである。しかし、目がヤブニラミになるほど新しすぎではないけない』のだそうだ。私たちのレベルまでリークされてくるのはこの程度だね」

この朝食テーブルの会話の切れはしを耳にしたのはアクセルだった。でも寒気ががたがた震えだしたのは三人同時だった。三人の霊スピリットの震えはあの時始まって、今も止まらず続いている。親たちの話の意味を完全に理解できたワケではなかったが、それでも三人の心を芯まで震え上がらせるには十分だっ

た。と同時に彼らの頭を混乱させもした。有毒で危険なヘビはみんな胎生で、すでに形の整った子どもを産み、普通の意味でいう卵を産みはしない。卵を産むのはまったく害のない心優しいヘビばかりなのに、一体どこのだれが（自分たちは卵を産まないというだけの理由で）この愛すべき生き物を孵かえる前に殻のまま殺してしまいたいと思うだろうか？

「このすべての後ろには、大きな怒りがあるのよ」
イニアールが言った。「怒りは自分が合理的でありたいなんて思いません」

ロード・ランドル②は人間種族の男の子だった。受胎したのはガラスのチューブの中だったが、人間であることに変わりはない。イニアール③は歩行人間模倣タイプコンピューターだった。非機械の要素は何ひとつない。時によって彼女の中に陽気ないたずらものが住んでいることだけを除いてである。いつもいるとは限らないこの間借り人について、実験の『両親』たちはまったく気がついていなかった。彼女の『文法的』性別は男性だった。合理的基準で

判断するならば、彼女に性別と呼べるものがあるはずはなかった。しかしそんなこととは無関係に、彼女は自分の子であると言い張って譲らず、その一途さによって彼女は女の子になり通した。アクセルはアクセルザルと呼ばれる類人猿の一種だった。この種はときに「鍛冶屋ザル」という別名で呼ばれる。野生の状態で金属を加工して使いこなす能力を示していたからだ。また一名「黄金ザル」とも呼ばれた。そんな体色をしていたからである。また時には「青目ザル」と呼ばれる場合もあった。

この「三人」は生まれた時から、自分たちを取り囲んで進んでいる実験の一部として、三人一緒に育てられてきた。彼らには生活区域として、二ヘクタール、あるいは約五エーカーの人工野生区が与えられていた。ずいぶん贅沢な広さを持った土地だった。この時代、土地はかつてのように容易に手に入るものではなくなっていたからだ。他の実験が同時に行われていて、その実験がこの区画を共用していた。ほかの実験植物や昆虫、実験哺乳類、有袋類、

デブのナマケモノ、バク、フクロアナグマ、ブタたちが暮らしていた。このすべてが腐食した木、肥土、腐土、裂岩に依存して生活していた。ここには食用になる実験イモムシがいて、これは一匹一トン以上の重さがあった。ただし今の段階でこれを食べれば往々にして気分が悪くなった。いっぽう域内には太った実験魚がいて、水流や水たまりの底に生じて溜った栄養分の高い泥を食べて大きく育っていた。他の生物がこれを食べる。でも食べられて減るよりはやい速度で子孫を増やしていた。また図体の大きい水鳥がいた。これら水鳥は自由に飛ぶことができた。しかし、あるところまで飛ぶと、それ以上は飛べなくなつた。この二ヘクタール区域の上には透明な覆いがかかっていたのだ。また実験「パンの森」があり、蜜キビ、特大ベリーの蔓つたが生え育っていた。そして滝が三つあって水しぶきを上げ、崖や岩の裂け目があり、まさに絵になる景観を生み出していた。もうほとんど「自然」と呼んで差支えないような、一つ一つの要素がたがいに結ばれた自足システムを

作り上げていた。

それでも「選ばれた三人」は、一番初めのころから、自分たちのまわりにあるのが完全な「自然」ではないことに（まるで彼らは生まれる前から、自然と自然でないものの区別を理解する力があつたかのようにだ）気づいていた。そこにある滝には自然の状態に何か付け加わつた要素があつた（だから「超自然」の要素と呼ぶべきだったのか）。水が崩れ落ちていく滝の真ん中に、ほとんど外からは目に入らない透明なチューブがあつた。このチューブを通じて水が再び滝のてっぺんに運ばれているのだ。「三人」がこの滝以外の滝を見たことは一度もなかつた。それでもなぜか、彼らにはこのチューブが自然と呼ばれる世界事象に属するものでないことを見抜く能力があつたのだ。

また三人がよくぶら下がつてアルファ崖とベータ崖を隔てる水の上を飛び越える蔓があつて、これは、間違ひなく緑の葉っぱがはえた生きた蔓だつた。それなのに生きてはいるとはいえない何か、金属で

きたワイヤが中に撚り込まれていたのでつた。だから外見はちつとも変わらない他の蔓は時に切れたりしなかつた。この補強ワイヤは「自然」という世界の事象に属するものではないのが「選ばれた三人」には分かつた。これは「機械物」と呼ばれる世界事象に属するもの、イニアルを構成している事象のものなのだ。そしてまたこの領域の上にかかつている覆いにも、何やら疑問を差し挟むべきところがあつた。この透明な覆いにだれにも先んじて挑戦したのはアクセルだつた。三人全員がすでに六才になつていた時のことである。

弓と矢を発明したのはロード・ランダルだつたが、だれよりも力いっぱい遠くまで矢を射れるようになったのはアクセルだつた。そしてだれよりも高くまでである。六才の年齢で、彼は多くの人間たちが長らく夢見てきたことをついにやり遂げた。空に手を届かせ、空にしるしをつけたのだ。矢じりを泥に浸け、天に向けて放つた。超人的な腕まえだつ

た。そして頭上二十メートルにあつた透明な天蓋に泥のしるしをつけた。つけた泥のしるしの数は約三百、カルデア表意システムのうち記述用のものを使ってメッセージを書きつけた。三人は独力で表記法を再発明していたのだ。彼らは大空にこう書きつけた。「もし空の上になれかいるなら、合図をして送れ」三人のことばには直ちに答が与えられた。不意の稲妻がひらめき、短い夕立が空の覆いの上側で降り注いだのだ。彼らの書いたメッセージは、雨水に洗われても消え去らなかつた。「選ばれた三人」は満ち足りた気持ちになつた。この空の外側、はるか彼方にだれかがいる。時おりこの地区を訪れて大小さまざまな手を加えてゆく不自然に無言なだれか、やつて来る時には自分たちが周りの目には見えない存在であろうと懸命に努めているあのものたちよりもつと重要なだれかが。

「三人」は生後一週間の時から、見えない覆いに囲まれたこの世界で生きてきた。えつ、でもちよつと待った。まあ機械なら生後一週間以内でもここで生

きることができただろう。またアクセルザルは、知られざる力の持ち主であり、独力で生き抜くこともあり得たかもしれない。しかし単に人間の新生児でしかないものに、こんな環境下で一人生き延びる力があつたというのか？ いったい何を食べて生きたというのか？

つまり、こうである。食べ物にはまず実験トリュフがあつた。これは地表のすぐ下で育ち、時には地面を破つて頭を出す。そして生乳よりもずつと強い、嗅いだものを引きつけずにおかない匂いを放つ。これを乳と同様、簡単に吸つて飲むことができた。また実験タロの根と実験ヤムがあり、これも十分早い時期から、というかまあ生後三カ月ぐらからは食物にできた。もとよりロード・ランダルは並みの男児ではなかつたのだ。標準測定域をはるかに越えたIQを持つよう優生学的配慮、バイオ操作を受けて生み出されたのだ。この三人の全員に対して、探知スキャナーは大変早い時期から繰り返し「超特級！超特級！」と警告のチャイムを鳴らし続け、彼らが

型破りの知能の持ち主、あるいは「超特級」クラス
の存在であると明かしていた。この警報はしかる
べき場所にしっかりと記録され、何ものかの心に、
しっかりと留めおかれることになった。

子どもたちがそろって一才の時、彼らの住む世界
からリン・ランダル屋敷の裏口へと入る扉が開いた。
「選ばれた三人」は目の前に立ちあらわれた世界に
歩いて入った。そこに見つけ出した場所、自分たち
に入り込める場所という場所すべてを窮めつくして
いく中で、彼らの人生第二段階の幕が切つて落とさ
れた。

この時期を迎えるまでに、三人全員はそれぞれ自
分流のやり方で立派に歩けるようになっていた。ま
た全員幾種類かのコード、あるいは言葉を使つて互
いに会話できるようになっていた。だからジョー
ジ・リン・ランダルとアイリス・リン・ランダルの使
う言葉もたいした困難なく理解するようになってい
た。「選ばれた三人」は研ぎ澄まされた直感を持つ
ていたので、一週間たたないうちに、彼らはこの二

人の大人が言うことを、二人が口をあける前からす
でに理解できるようになった。だからといってリン
・ランダル屋敷の興味深さが失われることはまった
くなかった。

彼らが見つけたものの中に、まず音楽があった。
これに比べられる出会いはなかった。「三人」には
屋敷にあった一万本の収集テープの山の中に踏み
わけ入つていく、直感的な力が備わっていた。それ
にしても、子どもたちが聴くテープを聴いて、二人
の大人リン・ランダルは気が狂いそうになった。そ
のテープはもともと自分たちが収集したコレクショ
ンのはずだった。ところが「つくりが違う耳」のそ
ばで聴いた時、もはや同じ音楽ではなかった。三つ
のまつさらな心の中に混ぜ入れられた時、楽音は少
しばかり強い力を帯び過ぎていた。聞く心の違いが、
音楽をまったく別の音楽たらしめる場をあらわれ出
させたのだ。

つづきは書籍版でお楽しみ下さい。

井上 央 いのうえひろし

1954 年 10 月生まれ。

1978 年、神戸大学農学部卒業

1990 年、オレゴン大学 Ph.D. (文化人類学)

マウント・ホリヨーク大学助教授を経て、現在は大阪キリスト教短期大学 教授。

電子立ち読み版 蛇の卵

2013 年 3 月 5 日 立読版 発行

著 者 R・A・ラファティ
編 者 井 上 央
発行者 青 木 治 道
発行所 株式会社 青 心 社

〒 550-0005 大阪市西区西本町 1-13-38

新 興 産 ビ ル 7 2 0

電話 06-6543-2718

FAX 06-6543-2719

振替 00930-7-21375

<http://www.seishinsha-online.co.jp/>

©Hiroshi Inoue 2013 All rights reserved.

【著者紹介】

R・A・ラファティ (1914～2002)

1914年アメリカ・アイオワ州で生まれる。
1960年に「氷河来たる」を「サイエンス・
フィクション・ストーリーズ」誌に発表。
2002年に87歳で他界するまでに長編
18作、短編150篇以上を発表。代表作に
「九百人のお祖母さん」「地球礁」「翼の贈
りもの」などがある。特異なユーモアで綴
られた幻想味あふれる作品は、今でも高
い評価を受けている。

蛇の卵 電子無料立読版

『蛇の卵』は、全国の書店でお買い求めいただけます。

当社直販を希望の方は下記 url へ

<http://www.seishinsha-online.co.jp>

青心社



Seishinsha ST Series